



写真：長澤直子

# 《魔笛》をあらかじめ名物に

文＝田辺とおる

《オペラ劇場あらかわバイロイト》公演監督

モーツァルト作曲のメルヘンオペラ、《魔笛》を再演します。

というよりも《オペラ劇場あらかわバイロイト》の定点観測的な作品として、毎年できるかどうかはわかりませんが、定期的に上演していきたいと思っています。

カンパニーの名が示す通り、ワーグナーオペラの定期公演を謳って《あらかわバイロイト》は二〇〇九年にスタートしました。第一回公演は楽劇《バルシファル》。爾来、《ワルキューレ》《神々の黄昏》と毎年一本のワーグナーオペラを上演し、今年の十一月には《ラインの黄金》を舞台にかけます。このペースは今後も継続していきますが、ワーグナーの普及を図るためにもまずはドイツオペラそのものに親しんで戴きたいと願い、《魅惑のドイツオペラ》というシリーズを昨年創設して、最初に選んだのが《魔笛》と《ヘンゼルとグレーテル》です。

そして今年はこの二作を再演し、今後とも「誰もが知っている」ドイツオペラと、「名作の誉れ高いが日本人公演の少ない」ワーグナー作品をカンパニーの両輪にしたいと思っています。

フレッシュな気分で大作の新制作に取り組むこともエキサイティングですが、手に馴染んだレパートリーと再会することは、劇場人にとって格別の喜びです。欧米のオペラハウスは大道具や衣装を倉庫に保管し何年にもわたって再演しますが、日本のオペラ制作では再演を想定せず、千秋楽に全てを解体することがほとんどです。それも芝居やミュージカルのように月単位のロングランができるわけではなく週末一回で終わりますので、二ヶ月以上の稽古を積んできた関係者にとっては「うたかたの夢」という気分も拭えません。

常打ち小屋の実現は困難であっても、ドイツオペラのベテラン指揮者クリスティアン・ハンマーが振り、ドイツ語の歌とセリフで綴る名作メルヘンのオリジナルな上演が「《あらかわバイロイト》なら毎年やってみよう」と話題になるように定着させることは、私達の抱く多くの悲願のうちの一つです。

今でも歌舞伎は、ニッパチといって客入りの少ない二月八月に勧進帳と忠臣蔵を出しては集客を図ります。勧進帳の舞台「安宅の関」をもじった「またかの関」も見物衆には古典的な洒落。「まてき」も「またか」とシャレてもらえるように、頑張りたいと思います！

【昨年公演の批評から】

クリスティアン・ハンマー指揮で序曲が緩急よく響いた時、これはいい舞台になりそうだと予感した。その期待に違わず、指揮は功緻に歌い手、オケをリードし、ドラマと音楽を造形していく。そして経験を重ねている実力派の歌い手が若手を引き立てる。好ましいバランスだとも感じた。タミーノ青柳素晴、パミーナ山本真由美、パペゲーノ田辺とおる、夜の女王飯田みち代などは、まずは役柄を踏まえてつつがない。第2幕、飯田の夜の女王（復讐の aria）など声の美技に怨念をからませ上々。そして山本パミーナも、揺れ動き懊悩する娘心を細心の演唱と芝居で創出した。芸達者な田辺は、野放図でやんちゃな自然児パペゲーノを心地良く歌い演じた。青柳タミーノはリリカルだが意志的な演唱が終始耳を惹きつける。モノスタトス高森弘明のコミカルな味、ザラストロ中川郁太郎の低音の魅力も今後に一層期待。演出は佐藤美晴。（小山晃・音楽の友二〇一一年七月号）